

お寺の社会性

— 生奥坊主のつづやき —

拾参

竹中尚文

1. 研修会

先月、研修会で長島に行った。私たちがいろんな研修会がある。坊さんたちの研修会、一般の人達と坊さんと合同でする研修会や、坊さんとその家族の研修会などがある。形式はパネルディスカッションか講演会のどちらかが殆どだ。そのテーマもさまざまだ。去年は野中広務氏の講演があった。私は『差別と日本人』（野中広務、辛淑玉共著）をととても気に入っていたので、楽しみに出掛けた。野中氏の政治放談になってしまったのが残念だった。

今回の現地研修は、私たちの企画であった。私は、現地研修を気に入っている。だから、近隣の寺の住職やその家族対象の研修会に、長島に行こうと言った。

現地研修というのは、宗教的には巡礼とも言える。多くの宗教で巡礼と言うのは巧い手だと思っている。キリスト教の聖地巡礼、イスラム教のメッカ巡礼もあるが、仏教でも巡礼は盛んにおこなわれてきた。インドでもあったし、日本でも西国三十三所や四国八十八所にお参りをすることが古来より盛んにおこなわれてきた。「お遍路さん」という言葉でその姿がイメージできるのは、今も変わらない。このことで真言宗は信徒を多く獲得してきた。これによって多くの人々が真言の教えの入り口に立ったのである。巡礼という行為は入門者や初心者には有効な手立てである。

2. 長島愛生園

瀬戸内海は穏やかな海である。兵庫県を西に過ぎるあたりから、島々が多くなる。その多くは、名前を聞いても覚えきれないような島の数と平凡な姿である。そうした島々が穏やかな海にのんびりと浮かぶ。じつに平和な光景である。

長島はそれらの島の一つである。岡山県瀬戸内市にあって、現在は本土と短い橋でつながっているが、島である。この島には二つの国立ハンセン病療養所がある。長島愛生園(ながしまあいせいえん)と邑久光明園(おくこうみょうえん)である。ハンセン病療養所は全国に15ヶ所(国立13, 私立2)あるという。

私はこれまでハンセン病についてほとんど知らなかった。だから、現地研修をしようと言ったのである。近所の僧侶の一人が長島に何度も足を運んで知識を持ち合わせていたので、彼を講師にしてこの研修会をした。こんな企画を立てたら、他にも何人かの僧侶がここに関わり続けていた。

ハンセン病は「らい菌」によって発症する。らい菌は結核菌とよく似

た菌で、感染力も弱い。だから、これまでこの療養所で患者からスタッフへの感染は一度もなかったと言う。ハンセン病はこの菌の発見者の名前をとった。この病気は末梢神経がおかされ知覚麻痺がおこる。この知覚麻痺は身体の端っこの方からおこるので、手、足、鼻、耳などから感覚がなくなるそうだ。そうすると、怪我や火傷をしても感じないので気付かないままになって、感染症を起こすことが多い。そうして壊疽をおこして、手足等の変形や欠損がおこることも多い。ハンセン病は1940年代半ばに治療薬が発見されて、治療が容易な病気になった。従って、現在の日本には、ハンセン病患者は一人もいない。

ハンセン病患者の収容は、明治末期から始まったそうだ。1931年に「癩予防法」が制定されて、強制収容が始まった。これ以降、一般社会から急速にハンセン病患者が消えていく。また、これ以前、大正時代に断種も始まった。この話を聞いた時、統合失調症のことを思いだした。統合失調症も1930年代よりナチス

ドイツで施設に患者を押し込めて、民族浄化を進めた。多様性を認めず寛容性を持たない人々の作る社会が人々をはじき出してきた。私たちはその潮流から決別できたのだろうか。

第二次大戦後も、「らい予防法」が作られ、「優生保護法」の対象にハンセン病が入れられ、合法的に強制手術がおこなわれてきた。2001年の「らい予防法違憲訴訟」勝訴で流れが変わり、2008年に「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が制定されて現在に至っているそうだ。

私たちは小型バスで長島愛生園を訪れた。バスが園内に入ると、震災の仮設住宅のような住居の中を抜ける。住居区域と非住居施設区域がある。その中で、私たちは「お寺」と呼ぶ施設に入った。この園内にはいくつかの宗教施設があって、彼らの信仰が保証されている。長島愛生園の場合、約40%の真宗信徒、約20%のキリスト教徒、40%程が真言宗や禅宗や日蓮宗やその他いろんな宗教の人達である。

お寺に集まってきてくれた人々はいずれもお年寄りである。現在の長島愛生園の入所者の平均年齢が83歳程である。ハンセン病の治療薬の発見が1940年代半ばであるから、戦後はハンセン病になってもすぐに治るので、療養所に入れられる人は激減した。また、断種によって園内で新しい世代の誕生はなかった。だからこの入所者は高齢者ばかりになった。

お寺に集まってくれた人々のうちで福島さんが、本名は福岡さんだと言う。本名を明かしたのは数年前だそうだ。もう60年ほど福島と名乗ってきたのだから、福岡さんと呼ばれてもピンとこないそうだ。名前を変えた人は多い。それは、入所が同時に故郷や家族との決別であった。ハンセン病に対する差別が家族に及ぶことを恐れてのことだ。今、本名を名乗ってもだいじょうぶだ、故郷に帰ってもいいと言われても、自分を知る人は故郷にいなくなってしまっている。何より、本当に差別は無くなったのだろうか。

次に訪れたのは、歴史館という歴

史資料を展示している建物である。元々は事務管理棟として建てられたものである。展示物の中に、二重構造になった湯飲みがあった。ステンレス製などの保温カップと同じ様の構造の商品があるが、ここで焼かれた陶器で現在も使われている。ハンセン病は抹消神経が侵されていって、熱さや痛みを感じるができなくなる。この湯飲みは、手の火傷を防ぐための湯飲みである。彼らは火傷や怪我が多かった。国家は彼らの強制収容を決めたが、長島の開発は彼らに課せられた。道を切り開き、建物を建てた。重機の無い時代のことである。彼らの手足は瞬間に、傷を負った。それに気付かないまま感染症になり、手足を切断した人や変形や癒着をしてしまった人も多い。

次に訪れたのは、納骨堂である。いろんな人々や団体の寄付もあって、この地で亡くなった方の納骨堂ができた。特に一定の宗教を表現しない納骨堂である。入所者や職員もここに納骨されている。国有地に立つ共同の納骨堂である。ここには靖

国神社のような問題はない。とってもシンプルで、私は好きだ、こんな納骨堂。

最後に案内されたのは、収容棧橋とそれに続く収容所である。収容棧橋というのは、この長島に上陸したならもう出ていくことのないことを意味した。私は、この棧橋と収容所をみて、規模は違うがニューヨークのエリス島を思い出した。ヨーロッパからアメリカに渡った移民が始めて上陸するのがエリス島である。太平洋を渡った移民はサンフランシスコ湾のエンジェル島に上陸した。検疫等のためにエリス島でしばらくの間、留め置かれるのである。エリス島の資料館には、当時の人々の不安に満ちた眼差しの写真があった。しかし、アメリカに渡った移民には明日があったし、アメリカンドリームを持てた。長島に上陸した彼らにはそれすらなかった。どんな眼差しで上陸したのだろう。

収容所は当時のまま残っている。外観はモルタル洋館風で、内部は木造であった。戦前の学校を思わせる建物である。中に入ると、すぐに消

毒剤の風呂に入れられて、現金などは取り上げられて持ち込み品の消毒があった。縦10メートル程で横が20メートル程の部屋があって、そこに数日間留め置かれて、どこの寮に入るかが決められたそうである。私たちを案内してくれた岡山さんがそう言って説明してくれた。彼が少年の頃にこの島に連れてこられた。「私の寝台は、ちょうどこのあたりだった」と部屋の中で手を広げて示してくれた。そして「右側の人は、入所してすぐに亡くなった」と言った。岡山少年の目には、この天井がどんな風に見えたのだろうか。窓の外をどんな思いで見っていたのだろうか。彼の眼差しには何が浮かんでいたのだろうか。

3. つながりの向こうに

岡山さんの気持ちを想像して頂けたらどうか。私の拙い文章でも、少しでも岡山さんのことを思ってもらえたらありがたい。私は、岡山さんにも福島さんにも会った。これからも会い続けたい。その思いを先の項に書いたつもりである。

出逢い、ふれ合い、つながる。この文章を読んでくださった人達が、岡山さんの事を思ってくだされれば嬉しい。そこに少しでもつながりができる。何年か先には、彼らの多くは亡くなっていくだろう。彼らとつながる人々がいなければ、死んだ後に誰の記憶にも残らない。それは彼らの存在そのものが何もなかったかのように消えていく。

確かにハンセン病にかかった人の思いは、私の計り知れないものだろう。僅かでもその気持ちをくもうとする。その悲しさを想像する。人の痛みや苦しみを想像するところに共感がある。人の苦しみや悲しみに寄り添うところに共感がある。

この共感こそが、人と人のつながりである。人生において、「体験して始めて分かる」ということがある。体験しなければ分からないのであれば、人生は全くつまらないものだ。自分の体験したことのみにはしか意味のない人生は、とても偏狭でさみしい。

神の存在を問うように、仏の存在を問うことはない。仏の存在を問う

ことは無意味である。私が仏とつながっていなければ、仏は存在しないに等しい。つながっていてこそ仏が存在するのである。

私の連載の第7回で仏について書いた。仏の三身説の法身仏を「生死を超越したまごころ」と書いた。この「まごころ」につながることによって仏の存在を感じるこ

とができる。私の存在を自覚するのである。つながる思いがなければ何の存在もない。仏につながる思いがなければ、仏教は始まらない。

仏教は、仏には成ったことはないが仏の気持ちを考えてみるところから始まる。仏とつながる思いを持つ人生は悪くない。